

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 外国語（英語）第73号

— 高等学校，特別支援学校対象 —

平成25年10月発行

### CAN-DOリストを踏まえた高等学校における 「書くこと」の指導の工夫

平成23年6月に「外国語能力の向上に関する検討会」がとりまとめた「国際共通語としての英語力向上のための五つの提言と具体的施策」においては，学習指導要領に基づき各中・高等学校が生徒に求める英語力を達成するための目標（学習到達目標）を「言語を用いて何ができるか」という観点から，「CAN-DOリスト」の形で具体的に設定することについて提言がなされた。

しかし，各学校において，「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標が設定されていても，それが指導・評価に十分生かされていない現状も見られる。

そこで本稿では，「CAN-DOリスト」の形で設定された学習到達目標（以下，「CAN-DOリスト」）を設定することの意義を整理するとともに，それに即した具体的な「書くこと」の指導と評価の工夫について述べる。

#### 1 CAN-DOリスト設定の目的

##### (1) 4技能の総合的育成につながる指導

外国語科において，CAN-DOリストの設定が求められる背景として社会の急速なグローバル化がある。それに伴い，

外国語によるコミュニケーション能力，自らの考えを適切に伝える能力を養う指導が今後求められる。

学習指導要領で強調されている「聞くこと」，「話すこと」，「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な育成を，高校三か年のどの時期にどの程度図っていくのかを考える指針となるのがCAN-DOリストである。

##### (2) 目標の明確化と指導・評価の改善

CAN-DOリストの設定により，高等学校外国語科の観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について，生徒が卒業時まで身に付ける能力を各学校が明確にし，学年の目標と各単元の目標を連動させることができ，生徒の指導と評価の改善に活用することができる。

##### (3) 生徒と教師による目的の共有

生涯学習の観点から，教師が生徒と目標を共有することにより，言語習得に必要な自律的学習者として，生徒が主体的に学習する態度・姿勢を育成することができる。と考える。

## 2 CAN-DOリストの設定手順

### (1) 卒業時の学習到達目標の設定

生徒の学習の状況や地域の実態等を踏まえた上で、卒業時の学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という形で設定し、卒業までに生徒が身に付ける能力の全体像を描くことが重要である。その目標は、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づいたものとするとともに、各学校や生徒の状況を踏まえたものとする必要がある。

### (2) 学年ごとの学習到達目標の設定

卒業時の学習到達目標を達成するため、各学年段階における指導や評価に資するよう、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの目標として、4技能を用いて「～することができる」という形で設定することが望ましい。学年の進行に応じて学習到達目標も生徒の発達段階に応じたものとなるよう作成することが重要である。

## 3 CAN-DOリストの活用法

### (1) 年間の指導と評価の計画への反映

CAN-DOリストを年間指導計画にどのように位置付け、どのような指導を行うか、また、設定した目標の達成度をどのように把握し、評価するか、という視点で計画するなど、CAN-DOリストと年間指導計画とを有機的に連動させることは重要なことである。そのため、年度当初の授業開始前までに、CAN-DOリストの設定と並

行して年間指導計画を策定し、各単位における目標、評価方法等を計画する必要がある。

さらに、CAN-DOリストを高等学校におけるシラバス・年間指導計画に反映させ、生徒や保護者と学習到達目標を共有することが望ましい。

### (2) 単元計画への反映

CAN-DOリストを単元ごとの指導と評価の計画に反映するに当たっては、各学校で実際に行われている学習活動を、「言語を用いて何ができるようになるか」という観点から見直した上で、それを基に単元ごとの目標及び評価規準を設定する必要がある。授業においては、教科書を中心として、教師の創意工夫により、単元の目標を達成するに適した教材を活用しながら各時の学習指導を計画することが必要である。授業を行う際も、常に単元の目標や評価規準を意識することが重要である。

## 4 CAN-DOリストの設定の実際(具体例)

外国語科における評価の観点は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、  
「外国語表現の能力」、  
「外国語理解の能力」及び「言語や文化についての知識・理解」とされているが、このうちCAN-DOリスト形式の学習到達目標に即した評価の観点として適しているのは、「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」である。ここでは、「外国語表現の能力」の観点について具体例を示す。(表1、表2)

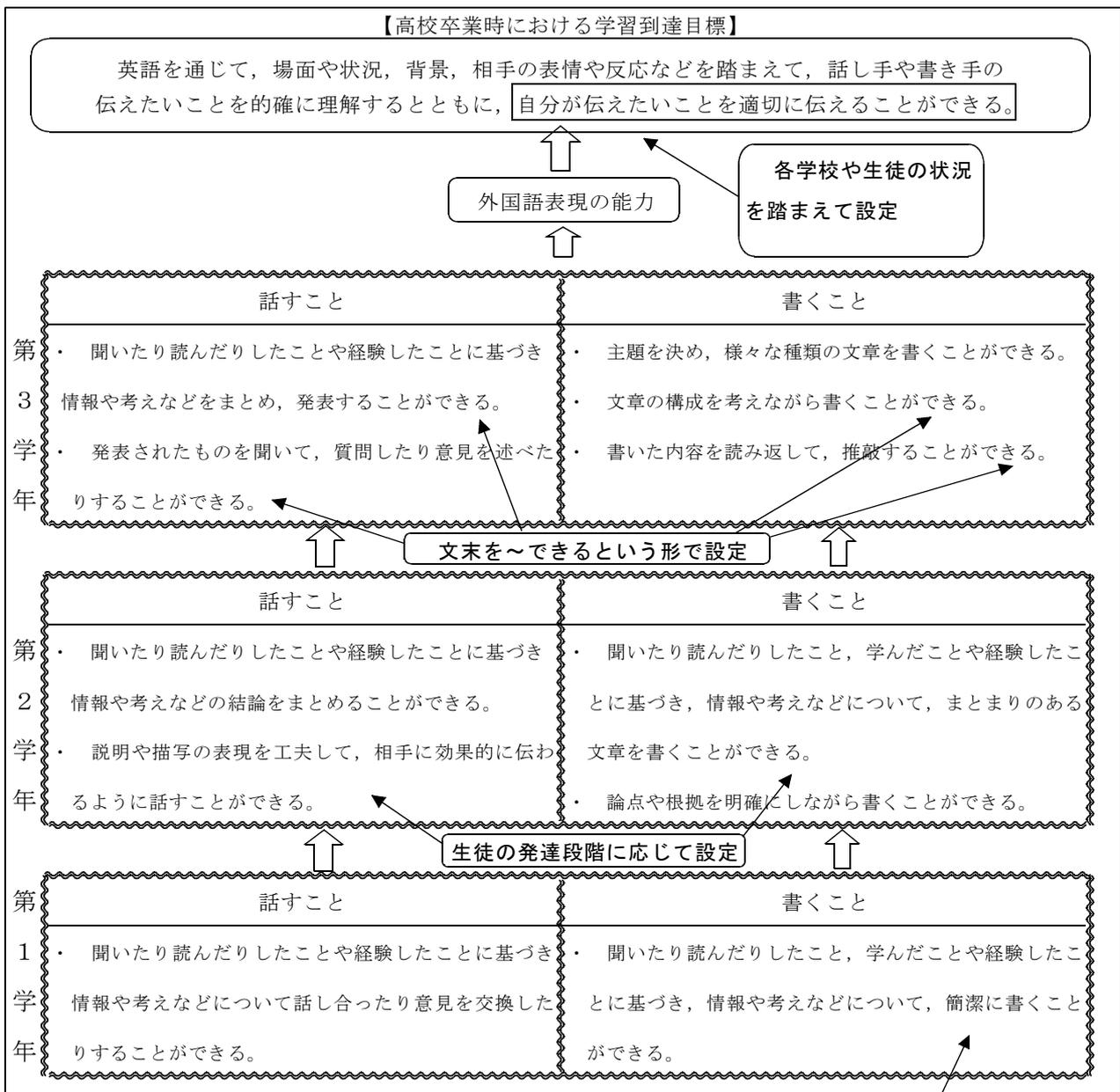


表1 CAN-DOリストの年間指導計画への反映の具体例

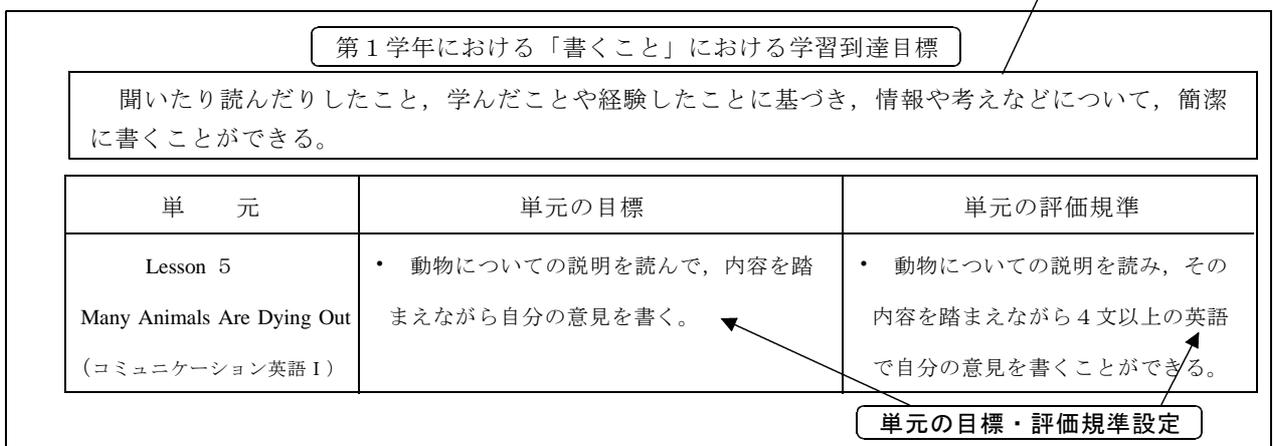


表2 CAN-DOリストの単元計画への反映の具体例

(表1, 2ともに平成25年3月 文部科学省『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』より)

## 5 CAN-DOリストを踏まえた書く指導の例

### (1) 単元の評価規準

CAN-DOリストを踏まえることにより、これまであまり考慮されなかった単元間の評価規準やつながりを意識して指導することが可能である。表2に挙げた第1学年におけるLesson 5を例に、「書くこと」における本単元の評価規準を次のように設定する。

#### 【評価規準】

動物についての説明を読んで、内容を踏まえながら4文以上の英語で自分の意見を書くことができる。

### (2) 指導と評価のポイントの明確化

生徒に「書く活動」をさせる際に、どの程度の表現を教師が求めているのかを生徒に示すことで、生徒は具体的なイメージをもって活動に取り組むことができる。また、書いた作品に対する評価を適切かつ妥当なものにするために、設定した評価規準を基に、より具体的な評価のポイントを明確にしておくことで指導もしやすくなると思われる。

ここでは評価のポイントとして、次の4点を挙げる。活動に取り組みさせる際には、教師が次の4点を含んだ生徒作品例を事前に予想しておけば、指導のポイントも明確になる。

#### 【予想される生徒作品例】

I am shocked to know many animals are dying out. It is important to protect them. So, we should keep the environment clean. In order to keep the environment clean, I try not to throw garbage.

#### 【評価のポイント】

- ① 本文の具体的内容を取り上げている。
- ② 動物保護のために何ができるか自分の意見の記述がある。
- ③ discourse markerを用いて、論理的に英文を書いている。
- ④ 4文以上の英文を書いている。

### (3) 事後指導の例

上記のように評価のポイントを明確にすることにより、生徒一人一人に対する事後指導のポイントが明確になる。

例えば、評価のポイント③が不十分な生徒に対しては、discourse markerを例示し、文と文のつながりを意識させた上で、自己推敲の際に加筆させるなどの指導が考えられる。

## 6 最後に

生徒に「書く」活動をさせる際に、何をどれだけ書くことを求めるのか、教師が明確な到達目標をもっておくことは重要なことである。そのためにも、各学年においてどの程度の「書く」力を付けさせたいのか、各学期や時期、各単元・単位時間の中で、具体的にどのような目標を持たせるのか、各学校で作成しているCAN-DOリストを是非活用して考えていただきたい。

#### —参考文献—

- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』平成22年5月
- 文部科学省『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』平成25年3月
- 岡部幸枝・松本茂著『高等学校 新学習指導要領の展開』平成22年4月 明治図書

(教科教育研修課)